九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ミシガン大学研修記(1997-1998)

中里見, 敬
東北大学文学部 : 助教授

https://hdl.handle.net/2324/17118

出版情報：1998-06. 東北大学文学部中国文学研究室
バージョン：
権利関係：

Last modified 5/23/1998

Enriching Scholarship－－大学のコンピュータ事情

1998年5月22日

「教員各位。
技術と情報のリソースは、教員が教授法を向上し、学生に創造的な学習の機会を提供し、また研究を豊かにするのに役立つものです。しかし、新しい情報リソースを教育課程や研究に結びつけ、新たな方法による教育と研究へと高めていくために、新技術を探して試してみる時間を持つことは容易なことではありません。・・・
あなたの学殖をより豊かにする(enriching scholarship)この価値ある体験に、１週間を通して参加されることを待ち望んでいます。」

このような書き出しで始まる "Enriching Scholarship: Integrating Teaching, Information and Technology" というパンフレットが、僕のメールボックスにも配布されてきた。

学年末試験とその採点も終わった、5月11日から15日までの週は、教員向けのコンピュータ講座が大学全体で開かれる。主催の Teaching and Technology Collaborative(TTC) は、大学のコンピュータや電話を統轄する Information Technology Division や、教授法についてしばしば公開の講座を開く Center for Research on Learning and Teaching 、コンピュータやAVによる外国語教育を支援する Language Resource Center 、それに University Library などを母体にした組織である。したがって、この１週間にわたる講座は、おのおのの組織がもつ資源を結集して教員に還元することを通して、各組織の有用性をアピールし、将来にわたって組織の維持と予算の獲得をねらっているはずだ。

とはいえ、学生たちのキーボードをたたく音が消えたコンピュータ室は、この期間風船などでちょっぴり華やかな演出をほどこされて、教員たちの受講を待つことになるわけだ。

アメリカの大学では、すべての教職員と学生に Computing Account が普及し、もはやお互いの連絡は電話ではなく Email で行うことが定着している。事務職員はみな自分用のパソコンの前に座り、ほとんどの仕事はネットワークを通して片づけている。また、教員にも充実したウェッブ・サイトを持つ人が多く、教育内容や研究情報を公開し共有することに熱心だ。アメリカの大学から始まったインターネットの新しい文化を支えるものの一つとして、このような講座の存在をあげることができるだろう。

この5日間に、2時間程度の講座が50も用意されており、教員はそれぞれ自分のレベルと関心にあった講座に登録して、出席することになる。空席がある場合には外部の人の入場も可能だ。それでは、どのような内容の講座があるのか、いくつか紹介してみよう。より詳しく知りたい方は、TTC のウェッブ・サイトへ

Web Search Engines といった入門、Creating Web Pages with Claris HomePage/ Netscape Composer/ Microsoft FrontPage というホームページ作りの初歩から、Graphics for Web Pages や Web Databases Made Easy with the New FileMaker という次のステップのクラスまで、使用するソフトウェアごとに実用的な講座が用意されている。Comparison of HTML Editors なんてのもある。

外国語教育関係では、Web Activities for Foreign Language Instruction, Multimedia Resources for Foreign Languages といった講座に加えて、Language Resource Center の Open House では様々なデモンストレーションを見ることができる。

図書館関係では、Using the Digital Library, PEAK: Searching Online Journals といった電子化された本や雑誌の取り出し方のほかに、Copyright: Its Impact on Educators, Copyright: How to Seek Permission という講座もあって、電子化時代の著作権に関する啓蒙活動も忘れていない。

これらの内容を見てわかるように、講座の対象はコンピュータの素人なのである。専門家でなくても、どんどんコンピュータを使いこなし、データベースの構築やその公開までやってしまえる環境がここにはあり、それをサポートする体制が整っているということだ。

大学のいたるところに設置された Computing Room は、先の ITD によって管理されており、誰でも使用可能になっている。コンピュータは学部や研究室のものではなく、大学全体の財産となっている。そして、そこには技術スタッフが常駐していて、どんな質問にも対応してくれる。スタッフはフルタイムの専任はむしろ少数で、コンピュータに強い学生・院生も多く活躍している。

このように、ハードウェアだけでなく人的資源まで、分散させてしまうことなく、大学全体のために統合的に活用していく組織力はすばらしいものだ。

ふりかえって、日本の現状を考えると、僕のまわりにもコンピュータに詳しい同僚や同業者が何人もいて、彼らの力量と先見性は決してアメリカのコンピュータ・スタッフにひけをとらない。しかし、日本では彼らの努力を大学の資源とする仕組みがあるだろうか？また彼らが企画したプランを実行できる体制はあるだろうか？ そして、僕のような素人の質問に答えてくれるところ

は、日本の大学には残念ながら存在しないようだ。

これからのコンピュータ化の世界では、個々人の力量にもまして、それを統合していく組織力が鍵を握るように思えてならない。日本の組織に対する評価はこの10年ほどで完全に逆転し、その非能率性・非合理性はもはやアメリカでも広く知られるようになっている。とりわけ我々の専門分野における学術情報の公開は、アメリカ・台湾・中国などに大きく遅れをとっているといわざるをえない。

コンピュータの玄人から見れば幼稚かもしれない今回の講座、しかしこんな講座をイベント気分でやってしまう組織の柔軟性と、それによって教育・研究の向上を図るという愚直な姿勢こそが、アメリカの大学の強さの一因であることは間違いない。

〔ミシガン大学研修記〕へ